

平成25年度 実践集 おかもと 第1号 抄録

児童の「聞く、話す、読む、書く」力と豊かな人間性を育む取り組み ～昼休みの活動を通して～

小学部

小学部には8名の児童が在籍し、授業は基本的に学年毎となっているため、1～2人程度の少人数での学習となることが多い。そこで、そのような児童の実態等を考慮し、昼食後の昼休みの「読書の時間」には、集団での取り組みとして、曜日毎に以下の三つの活動を実施している。この中では特に、児童の「聞く、話す、読む、書く」力に働きかける活動を取り入れている。

- ① 読書・教師による読み聞かせ
- ② 遊びタイム
- ③ 児童による紙芝居

様々な病気により、幼少時から集団での生活経験が乏しい児童らを、昼休みに集団での活動の機会を設けることにより、どのような効果が見られ、またそれと同時にどのような課題が浮かび上がってきたか、平成24、25年度における昼休みの活動での実践を報告する。

「総合的な学習の時間」の実践 ～とちのき祭での発表をとおして～

中学部

中学部に在籍する生徒の病種は、循環器系・内分泌系等の疾患の生徒や発達障害からくる二次障害など様々である。病気、成育歴、環境など様々な要因からくる疲労感やストレス、不安感から学習意欲が高まらず集中力が持続しにくいことや、少人数での学習から友達同士と一緒に活動したり議論したりする集団の形態が取りにくいといった特徴が見られる。積極的に学習に取り組ませるにはどのような活動をしたらよいだろうと話合っている折、生徒たちから「グリーンカーテンを作りたい」、「自分で育てた野菜を食べたい」など様々な意見が出てきた。生活経験を豊かにし、中学部全体で活動することで、少しでも生徒たちの意欲につなげることができるならと、総合的な学習の時間を活用して実践しようということになった。この取り組みについて、平成24年度の活動を中心に実践を報告する。

高等部重複学級生徒の自立に向けての一取り組み

高等部

近年、発達障害やメンタル面で何らかの問題を抱える生徒がますます増え、学校生活においても対人関係や学習活動にその人特異の行動や困難があらわれている。このような生徒は、一人一人の支援内容が違うので、指導に当たっては当然その生徒をよく知ることが鍵となってくる。多様な指導法によって探りを入れ、信頼関係を築きながら少しずつ何かをつかんでいかなければならない。

これらの様々な支援内容が必要とされる本校の高等部重複学級の生徒において、高等部に入学して緊張や不安等で適応しにくかった1年生1学期から、2年生3学期までの授業実践をとおして、学校の授業に生徒を適応できるようにさせるために、高等部としてどのような実践を展開していけばいいのかを検討し、卒業後の進路までを見通した実践についてまとめた。

指導に活かす日々の『記録』の在り方

やしお学級

やしお学級の児童生徒は重複した障害を有しているため大半の児童生徒の表出はわずかだが体の動きや表情、バイタルなど教師は微細な表れをとらえようと日々授業に取り組んでいる。複数の教師でかかわる体制の中、各自が授業の記録をとり、共有し実践に活かすサイクルができたが記録の取り方や子どもを見る視点、評価へのつなぎ方など記録のあり方を見直す必要性を感じた。そこで平成24年度より指導に活かす日々の『記録』のあり方について検討を進めてきた。本稿ではその実践について報告する。

ICTの活用実践報告

おおり分教室

24年度にソフトバンク主催の「魔法のじゅうたんプロジェクト」に参加したことでタブレットパソコン（ipad）を学習に活用する実践が始まった。この実践から得た有効性を参考に、25年度には分教室独自で別個のタブレットパソコン（kindle）2台を導入することもできた。こうしたタブレットパソコンの実践活用を中心に、分教室でのICT機器の活用について2年間のいろいろな実践をまとめ、学習指導の充実を図るための報告とした。